

## 使徒言行録 18 章 1 節-11 節

### 『恐れるな、語り続けよ』

パウロはアテネの町からコリントの町へと向かいました。この町は西にはアドリア海に通じ、東にはエーゲ海に出る重要な港を擁し、ギリシャの歴史にとっても、ローマ帝国にとっても重要な町として発展しました。しかし紀元前146年にはローマ軍によって徹底的に破壊され、その後ローマの植民都市として、再建されました。パウロが訪れたコリントの町は再建されたコリントで、アカヤ州の首都として繁栄していました。パウロはこの町でイタリアからやってきたアキラとプリスキラという夫婦と出会います。ローマからユダヤ人を退去させるという命令により、二人はコリントの町にやってきたのです。

この夫婦はテント職人で、パウロと同じ職業でした。というかわれわれはここで初めてパウロがテント職人だったことを知るのです。テントは天幕とも呼ばれるもので、遊牧民にとって住居になるものでもあり、さまざまな需要があったもので、パウロは手に職をもった職業人でした。その同業者であり、キリスト者である夫婦とパウロはコリントで出会い、二人の家に寄宿し、コリントでの伝道を開始しました。その後の夫婦の協力は、パウロにとってとても力強いものとなっていきました。そこにシラス、テモテがコリントに到着し、いわば万全のチームが整い、パウロはみ言葉を語ることに専念したのです。

この専念し、ということば、意味深長な言葉で、み言葉を語ることに摺まっていたとか、み言葉を語ることに苦勞するとも訳せる言葉です。専念というとただ美しく響きますが、摺まって苦勞していたというと、パウロの労苦が伝わってくるのです。パウロはここでこれまでと同様、まずユダヤ人に救い主はイエスなのだ、と力強く証しました。しかしここでもやはり、反対者が現れ、パウロを口汚くののしったので、パウロは服の塵を払って、異邦人伝道へと向かうのです。

さて、使徒言行録に聞き始めて、18章まで進んできたのですが、ここであらためて思いめぐらしたいことがあります。それは、わたしたちは使徒言行録から何を聞くのか、聞いてきたのか、ということです。今日の個所でもそうですが、使徒言行録を読むと、知らないことがたくさん出てきます。地名も人名も、そこで起こったことも。たとえば言うなら、高校の世界史とか日本史の勉強をするような趣きもあります。そして事実使徒言行録を読むことは、最初の

キリスト教会の歴史を学ぶことにもなり、どういう人たちがどういう環境の中で、福音を宣べ伝え、それによって教会がどうなっていったのか、ということも学ぶことにもなります。使徒言行録は新約聖書にあるたった一つだけの歴史書です。福音書も、手紙も、黙示録も歴史書ではない。その意味で歴史に関心のある人にとっては、確かに興味深いかもしれませんが。逆にそうでない人にとってはめんどくさい書物ということにもなりかねない。確かに、使徒言行録を読むということは、初代キリスト教会の歴史を学ぶ、という面があります。しかし、そういうことを含むにせよ、それに終始するものではない。初代教会の歴史の中で、わたしたちは何を聞くのか、ということになります。高校の歴史の勉強とは違って、ここの出来事は全部忘れたって、別に何ら困らない。読んで、何を最後に聞くのか。例えば、ペトロやステファノ、そしてパウロといった人物にスポットを当てて、彼らがどのように福音に聞き、その福音を宣べ伝えたのか、そのことに専念したのか、摺まれ、労苦したのか、その結果、初代教会はどのように成長していったのか。そのことを知ること。それは単なる歴史の勉強から一歩踏み込んで、使徒言行録から学べることです。しかし、使徒言行録に聞く、ということとはそれで終始するものでもない。

もしそこまでで、終了だとすれば、教会の歩みも、使徒たちの働きも、そういうことだったのか、そういうことがあったのか、で終わることができる。使徒言行録を閉じたときに、すごい話だったね、よく頑張ったんだね、で終わることができてしまう。使徒言行録に聞く、ということとはむしろそこから始まるものがある。

森有正という哲学者、思想家がいました。森さんはすぐれた思想家で、東大で教鞭をとっておられましたが、戦後すぐにフランス留学し、そのままフランスで暮らされた方でした。森さんのお父さんは牧師で彼は幼い時から聖書に親しみ、聖書に聞き続けてその生涯を送られた方でした。森さんがフランスに留学する前、戦後すぐに時期に「近代精神とキリスト教」という本を出されました。まだ30代の森さんが書いた本です。この本の中で、森さんはこういう意味のことを言っておられる。

主イエスが語られた、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主なるあなたの神を愛せよ、ということは、神を、あなたのすべての行為の規準とすべしという神自身の命令を意味する、まったく実践的な誠めであって、神は宇宙の本源であるといったたぐいの知的な認識ではない。それは神の意思への人間の自覚的な絶対服従への命令である。森さんは、神との関係、信仰における関

係とは、神さまの意思に服従していく、という全く実践的なことだと言う。その実践的關係ぬきに、神とは何かとか、神さまの思いとは何か、と思弁的なことをこねくり回すことではない。「聖書の教えるところは神の神たることの積極的主張とそれへの人間の服従である。神と人間との実践的關係において、神が神となり、人が人となるのである。」つまり、神が神であるということは、人間はその神の意思に絶対服従するという以外はない、ということであり、神に服従して生きる、という実践的關係の中で人は人となり、信仰ははじめて生きる、と言っているのです。罪とは、信仰の反対で、自己を神にたいして独立したものとして生きること、その実践の全部だ、ということです。神に服従していない時の全部が罪だ、ということです。そして森さんは旧約聖書に登場する人物、アブラハムにせよ、モーセにせよ、ヨシュアにせよ、預言者にせよ、すべて、神の意思に服従する、という実践的關係の中で生きたのだ、と書き記していくのです。

読んで、あらためて思うのは、「やっぱりそうか」ということです。なんとなく感じてはいるけれど、口に出して言ってこなかったことのようにも思うのです。

信仰とは、神の恵みの中で、神の救いの業の中で、神にただただ服従することなのです。自己放棄して、神の意思に服従する。神の意思は聖書においては明確です。イエス・キリストの救いを受けなさい。キリストの救いの福音を証ししなさい、それです。信仰は神の前での自分らしい応答だ、というようなものではない。神の意思に自分が服従していくのですから、自分の考えや自分の理屈をこねてそれで神に應えるということにはならない。使徒言行録を読む。すると、そこにはいろいろな人物が登場する。ペトロも、ステファノもパウロも。それぞれに個性もあり、独自のものもあり、歩み方も皆違う。だがこの人たちに共通していることがある。それは神の意思に服従して生きていく人たちだ、ということです。服従しようと生きた人です。自分の意志に従わないで、神の意思に服従しようとした。

パウロとわたしは違う人間ですから、パウロのような人になりましょう、というのはしょせん無理な話ですし、意味のないことです。しかし、パウロが神の意思に服従して生きたその姿をわたしたちが見る、ということがまず第一歩です。そして、わたしが神に服従して生きていく、それがすなわち、使徒言行録を読む、ということなのです。例えばパウロの歩みを読み、自分は神に服従

していなかった、ということを知ることも大事な第一歩です。自分の意志に従って、神の意思に服従していない、その自分を知ることも大事なことです。それをホントに知ることは大事なことです。

パウロは行く先々で壁にぶつかりました。アジア州では御言葉を語ることを禁じられ、フィリピでは逮捕や鞭打ち、アテネではパウロの説教に対する嘲笑いや軽蔑と、さまざまな形でパウロに対する抵抗、反対、壁が立ちはだかりました。おそらく、そのたびごとに挫折感や、暗礁に乗り上げるような思いや、自分の力のなさに打ちのめされたでしょう。それは誰にだってあることです。しかしパウロにとって自分から判断する成功とか失敗が根本問題ではなかった。大事なことは自分が神の意思に従うかどうかだ、と受けとめていた。パウロはコリントの町でも、反対勢力、攻撃する者たちによってたたかれる。

彼は会堂の隣の家に移り、ユダヤ人や異邦人に福音を語り続ける。そのパウロに神の言葉が幻の中で与えられる。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加えるものはない。この町にはわたしの民が大勢いるからだ。」

あなたの現実の中で、福音を信じなさい。恐れるな。そしてその福音を語りなさい。証ししなさい。恐れて、黙ってしまうということになるな。わたしがあなたと共にいる。あなたの前にどんな人が立ちはだかつて、福音を損なうものは何もない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだ。福音に聞いて、福音を証しする、神に服従していく道はそこにはある。使徒言行録に聞くことは、神に服従することへとわたしを導くのです。